



## 幼稚園近感

— 東京都中央区教育会主催保育講演会筆記 —

倉 橋 惣 三

しばらく御無沙汰をしました、みなさんはお交りなく結構です。

私が皆さんに御無沙汰をし出してから、世の中にはいろいろのことがあり、喜び事や、憂いがありました。世の中の事は皆教育に関係があります。そして、すぐに幼稚園の中に入るとまでいなくても、先生の心を動かすと共に保育の心にも影響し、それが教育の上に影響せずにはいません。

一番大きなこととして日本が独立国という形をとつたのも最近の事です。独立国でなかつた時分、われわれを残念に思わせた事も沢山ありました。戦争に負けた時、国家の独立性が失われるという事をあまり切実には考えない人もあつたかも知れませんが、いざとなると想像もしないことが多く起りました。被占領国としての資格を失つた時、それをしみじみ感じたのでした。

それを幼稚園で小さい幼児らに残念々々、というわけのものでもなかつたでしたが、その間の保育は暗いものでした。

少くも講和が成立し独立国になつてみると真の保育が蘇りました。これからは、本当の日本人の保育ができる事になつたのです。これは保育上、何よりも一番喜ばしい事です。

次には立太子礼、これも独立国の大きな喜びです。そして今度皇太子様が世界を廻られますが、それもまことに目出度いことです。又反対に悲しい事もあります。日常生活はまだ暗いものです。子供にストの話を教える事もないでしょうが、今日の保育はそれと無関係でいられないのです。

これらの事は、幼稚園の外の社会の事なのですが、実は保育の上に大きな出来事でした。

こういういろ／＼な事が、ひし／＼と幼稚園に響いていますが、私達も喜んだり、悲しんだりしてきましたね。

さて、保育の道は永遠であり、不変であると言います。保育の根本は変わるべきではないでしょうが、実は保育は世界と共に動いています。これらを皆さんと話しあうのが幼稚園近感と題した訳です。

我国の教育で、近頃最も論議されているものは、修身科の問題です。新聞にも出ていて御承知と思いますが、終戦後修身科はあまり重きを置かれていませんでした。教科書もなくなる有様でした。それが今日、重大な問題になつて来ています。自然、私共の近感の中の主なこととして考えられてくるのであります。

修身科で狙っているものは道徳です。道徳を養ふ事にあります。そして、道徳性を養ふという事には誰も反対の無いことです。また幼稚園としても大切なことであるの言うまでもありません。

何故、今日修身科復活の声が強く言われるようになったかと言ひますと、最近、世の中が非道徳になりました。それが目にあまるからです。今日は道徳頹廢の時代と言つてもよく、これを支えていくものは教育、その始めは幼稚園の道徳教育です。そこで、修身科復活の主旨は幼稚園でも同様ですが、唯問題は、その修身科というものには従来種々の特色がありました。殊に幼稚園としては、よく考えなければならな

いところがありました。この機会にいろいろのことが問題にもなつて来ます。すなわち道徳教育をするといふ事には誰も反対はしませんが、修身科を復活するといふ事には実施に於て問題が出るのです。

幼稚園では、如何なる道徳教育をするか。所謂昔の修身科といつたものと同じでよいかどうか。この事はよく考えなくてはなりません。

道徳教育が大事であるという事から、すぐ修身科は大事であると結びつけるのはどうかと思います。昔の修身科の姿の中には、充分批判されなければならぬものがあります。殊に幼稚園においてそうです。従来の修身科に於ては、道徳生活を大層概念化してしました。一つ／＼の子供の生活というよりは、良い事と悪い事、何がいゝか、何が悪いかを、倫理的に論議して、実際の生活は捉えられていなかつた。

子供が「いゝ子になりたい」と言つたところで、それは極めて概念的で、「いゝ子」それで総てが解つてるようにすまされてきました。そして、これはいゝ事、これは悪い事と教え、こゝろいふ風におなりなさいと言ふ。子供には心身に触れず身につかない事です。

所謂道徳教育には生活に入つてこない事が多々あります。概念といふものは生きていなくてもよい。併し幼児の道徳教育が、それでいゝのでありましようか。

子供に「動物園に動物を見にゆきましよう」と話している先生がありますが「動物」というそのものはないのです。その中に生きているものは一つ／＼の猿や羊です。子供に動物園に行こうと、いうと子供は直ぐ「猿がいる？ 羊がいる？」と尋ねます。子供にとつて「猿」は動物とは無関係ではないが、動物そのものではありません。

漫然と概念的に「いゝ事をしよう」というのも、これと同じ事であると思います。

修身科は道徳を道徳としてあまりに考えてきたから、生きていない弊害がありました。又余りきつちりしているが為、味も悩みも苦しみも、問題もない。いゝ事を今日は四つ、明日は五つするといふ事が道徳ではない。生きた問題に触れていかななくてはなりません。

修身科では徳目を教えます。そうして、今日はこれだけ守つたと云う。こういう概念的、形式的、生きていない事で、ほんとうの生活が済むものでしょうか。生きている事に重きを置く我々はそれでは気が済まないのです。子供の道徳教育は子供の将来本当に生きてゆく道徳生活の源を作る。道徳性の教育は、そうでなければならぬと思います。

我々が道徳の書物として読むものは、大概こういつた動きのないものです。そして面白くない。面白くないと云うのは悪い事をするのを抑えつけるから面白くないのではない、も

つと根本に溯つて、先生は私の生活を少しも察しては呉れない。顔をみれば善を守れ／＼とおつしやる。それだから面白くないのではないのでしょうか。「いたづらをしてはいけません。いつも言っているでしょう」と言うのは子供に対する結論です。いたづらをしている子供を見て、花を取るのはいけない事だが、花を美しいと感じる心に察してやるのが、生きている扱いです。

少し話が飛びますが、道徳の言葉をもつてきて道徳を教えるというのでは、とても道徳教育はできません。幼稚園に於ては、もつと心もちに入るものでなくては。大人や中学生に与える道徳論ではすまないのです。

小説により精神修養ができるといふのも、その中に、人間の心もちが了解されるからです。

このあいだ文楽を聞きました。お染、久松は修身には縁遠いが、久松がお染に恋愛する。お光は修身科の人に云わせるとどういふかも知れないけれども、芸術では人形にいきが通つている。概念的な道徳の教えでないところに動かされる。

幼児教育においても同じで、子供に対する思いやり、これが欠けていては言葉だけです。ラクガキをしてはいけません。が、白い壁にラクガキしてゆく子供の気持を思うと、無理もないという気がする。私は子供と一緒になつてラクガキの一

つもする先生を尊いと思いません。子供のしている事を叱らないといつては言い過ぎますかな、少くも子供はどんなに嬉しいでしょう。そこらに幼稚園の先生の真の味が出るのではないでしょうか。

修身の先生程「察し」の足りない人はないといつてはいけませんか。子供が寒いといふ、痛いと言ふと、先生は寒くないといふ、痛くないという。処で子供は先生の顔を恨めしうに見、先生のおつしやる事は尤もだが、私の事は解つていて下さらないと、口には出さないが云いたいでしょう。

先づ、始めの段階に於ては、子供の心に、人間の心の通うことを見出してほしいと思えます。

幼児は驚く程、人の気持を察する心を持つています。同情と云うことは、相手に共感する（ミットマイリング）ことです。ところが、修身としてはむづかしい事です。自分をさいて人の為にする事というのでむづかしいことになる。同情の行為はしても、共感の実のない事が多い。寒いねといえば、寒いねと答えてくれる方がどんなに嬉しいでしょう。それでは真の道徳であるまい。殊に幼稚園では同情とか助け合いななど云ふ難しいところまでいかないでも共感の気持を養つていきたい。

そこで幼稚園時代に於ては、人の心の中に相通うことを主にし、どれだけ自己を犠牲にしたか、ということ余り強

く出さないでもいふのではあるまいか。そうなると道徳の教育になつても、道徳性の教育でなくなることもある。

○○ちゃん傘がなくて濡れるわね、△△ちゃんは、襟巻がないので寒いわね、等々。これさえ気持の中に起れば、自分の傘を貸し、自分の襟巻を貸すという善行までいなくてもいふのではないかということになる。つまり人間同志の心の通いあうことです。人間的なこゝろを豊かに養うことです。一々の徳目的修身教育はその上のことです。

あまり長くなると、皆さんがお疲れになることに、共感が乏しい訳になりますから、これで終りましょう。

(拍手)

(十二月十二日)